



序

君やまらの跡を幾あやもなきるを
そあ歎ふもはうちもあわらしくもそそ
天地の者作らぬはまはたたいいそま
人の眼をよほはばむものさうして
しうをねをよまはたさあたをたつ
生るゝ海しうの及四葉のちまはしり
産るもよまはたせむをねをわらたは

頼りては東海より舟をこしてかたし
ゆもよきまの詞のむれいりたまはく 羅敷
糸を撚り髪をまき子とたたらうらわ
貴よすいふいぬまのふらしておまづの
言豫よのん長はひ若後書歳をこそ
残なるはひこし冊かこるれぬいそ
出らふよれもそまらうしあしあに
志くあしとれくきんあしあし似ぬれ

飛去ることを知らずおのつて西村を愛
新美と東土のこらにほくしてあよま
乾坤のあまをひらぶ年納のそとら
まらうしあよましあまらうしあまら
屋のれもそのあまらあまら
やうくまのなれしあまらあまら
かあむ使よとれやんまらあまら
みやとあたまのこしあまらあまら

美くしき花をいひよるのさうりて心を
そそぎしるるを初樹のまつる枝みく
いとそとくさきものたもきいさうよ子
神と神をりてこの操の枝採らぬ

平あ

又付有節石

嘉永五壬子歳四月於大州園興行

俳諧之連歌

賀開庵

有節

はーめり八すふ夜るや州の虫	和り細よ友の鳥かけ	名のきき水を煮茶り歳くそ	新り新り依の若成り	笛め久る度にそとの埃り立
	文海	梅室	淡節	琴亭

凡呂屋の螺貝の子うり物守

江別 杞柳

清宵と初めぬ場末も旅ゆく

梅通

芥しき桂をちよも持て来ぬ

蒼雪

秋戸の鈴の秋ハ結文再とちて

虚真

粟ハ目也度孫の産摩

仙菓

うらりとてハ焚焦す隅の菜

可真

くもりしきふふ日と夜

如圭

志果ハ鴨の舟ふく官の池

松鶴

性事の人ト言ふとて行々

紀別 委水

篋の玉もぶきしむ店山

讃岐 芳翠

篤実すまろ子息かよひよ

江別 青波

少し月持巻に暑さの存るまを

持巻 月拳

左門むお撲も延る所入府

拾山

新米のよき所と方とぬ立相扱

石堂

志羽輪うけあつてもれ交

雪徑

若弱子鞍屋初る花はうり

月坡

二子

利根の堤のちやよ州前

持履

孤南

春風に裾吹何多あはるよ

桃乙

湯立の毎をまたまひする

津輕

号岳

了伯母のやうよを話や人も

松高

お付多交袴着乃 膳

紀別

南溪

うれ出て道端うらあ昼氣

逸然

傳ふは一日元ぬ日の暈

月圭

熊井路の蜜柑の花の香むき

虚心

たのぬる母りあめりゆふ

豊圭

夏はあてこれ枕もぬれま

世外

口これの船戸あつそりき

江別

芋丈

立寄か分らぬ川のトリを

湖風

誇く巻りうらう草乃先

禾明

月まふこれ麻疹も海り

世歴

陳良

系尊のよひま言の新綿

畠田

造作も仕布に候よひま移り

文水

弘海の春うそふ教中し

思備

懐り入風つゝく立佳て

未峰

灯の光の部屋にすむお精進森

大坂 仙露

牛舌の脊もいそどき年のくれ

月兼

思い切しうやうふちる事

越后 白鳳

唐崎の松を松くく纏うと

松 雲岱

洒々つゝおると又踏く連

江州 松月

ちとよけ鳴ぬ月月明て

蔡魚

友を折ふしきよ谷篇

大坂 松玉

水車存ハエ夫の執作な久

松母

ちとりとく守家の眞素片

在京 杏平

未と人の口と増も花心

文翠

住連ゆきころのおしやれを

執筆

右一頌

春之部

夜々秋才之の明きや花の宿

尾張

黄山

初花也思ひ儲りぬまふり

李曠

明る秋のくまり跡もやむの上

大坂

其山

多崎や明り山いそれはら

素屋

草々らもはそひ物々花の風

一東

沸さのいよへありや山はら

江戸

見外

花折そかこよりらう芝のうへ

支季

る戸の透を浅ありむ子風

念く

ひと日つも子をよる旅露れ

遠州

杜水

花の香や明てり秋の空の幅

近江

花毒

おしゆーと思ひて来さふを川橋

三國

可慶

おるーとやうすや花の咲ちる

加賀

清由

障もねおちう名の何の橋れ

能登

花慶

秋の涼しゆくもも岐松の声

葵洲

花のまて来て志くらむや峰の雪 露 樵

松吹り取まされても流るるれ 沙 雄

一寸の胸子ちり込さるる 哉后 吾 雅

澄月の下の手りや山は久良 信列 桃 居

ちりそめや鳥も鳴ぬ 松 芳

更斗りもまきそける一衣 青 坡

うらつと想はぬさうや花の山 出羽 白 耳

風 幸——日ハ暖——はハ 榎 柏 年

け雪の花よりいむ志 登りれ 紀伊 寮 覚

そと——峰ハ流あそ山 榎 東讃 松 圃

嘆たぬ月も風娘おはるる 松 若

の流るるれ道よりこれさうも度り 芭 錦

榎も表表ゆき小島可 阿波 我 宮

風流る花かきくもさゆりか 淡路 梅 盧

ちとつとわかれもおのちも風 伊豫 菜 圃

の川と人ハ通るそ花の井 肥前 悠 々

夷亭と釈子との強き沙粒車 江戸 西馬

ちりや世の人にもゆれ梅花 由誓

日帰る玉川哉と梅え都 一具

おれも梅は古木をぬぐり 松什

人々もきしより嵐へ夕柳 得甚

雪やそれと梅ぬ竹も来て 等裁

うし雛の鳥りぬや 脛のへ 逸閑

急かすうし雛もさうさ 京 珍郎

急ひらうこれのうし雛の 素尺

急や急なもの 草陽

あつらひに袴 大阪 松隣

朝や雪 可庵

よく別て急 路松

ふさとして 猿人

振り 丹左

中言し水折りたり折る

如賀 卓文

月うつりの中へもともや市の壁

柳壺

色くしの味もる日あり道下り

晴江

唇の乾くところなり妻のふ

可由

花ありもあそも鳴るもの鞋

鳥石

曳鶴をおくも思のや二足不之

木圭

田一枚ゆりてあそもぬらり

槻海

猫ゆりて妻はあそもぬ家れ

曲園

鶯や第目乾く日の白ひ

三四 東雨

雲吹雪を詠て流し難黄れ

伊勢 六川

雨伸のおもものもや水のうへ

在竹

指やとのふりぬぬり妻の川

和菜

如月やゆらりふくも暁乃雁

江戸 蘆雪

こころ紅くまのえもや岩つじ

花兒

山鳥の種りけりて秋風吹

且冷

秋に似と秋の明徳やけの流

流斑

梅のや木はくさきぬ陸輝り

信笈 雪裏

若しあまのふりあけりおろし

能登 連布

うめはくさ海へまき引田の鷗

能登 古雀

百ちう紀老女も怪あり梅の香

淇湖

山科や牛の脊まきうめの花

支那

うさぎのさやうりもあまの光

半江

雪やよみ木もあまの風は篠

許風

うさぎのさやまのさきも花のよ

秋香

峰 雪もあまのすきや江の面

文珠

ゆれとさきもあまのさきも花のよ

水琴

有明のお月を引や霞の月

蕨水

まを海へさきもあまのさきも花のよ

霧曉

はるもや葉山めくさいさう

沙明

教入やひと日あまのさきも花のよ

育之

ふさぎもあまのさきもあまのさきも花のよ

晴雨

おの花や川を引果る不二のう

雲江

露の臺匂ふはりの階々
 龍枝
 江のよこりやあはれな梅の香
 梅村
 ついでと小風のほやも向はる
 林水
 面戸くねる雪水や夕ひりり
 兔遊
 吹くは東風のそらや浮水堂
 佳境
 芳川をぬ河の音と流るる
 如坐
 神の灯を明けて尺や福曆
 如兮
 河うりねる舟の露光や梅子月
 逸江

松のあやうもあまの海ぬいり
 茶屋
 雪の音うきをや日の出さき
 翠兒
 松松の香を吹くけそらぬ風
 控乙
 ちの雪も花うとくや暁染の日
 易年
 人を建年 誘ふ雪雀のうき音
 越后 茶山
 柳ころはくち平用もあうりり
 出羽 木賀
 月あしはゆれは離のあき風
 水竹
 七草や一色是とてひまのひら
 清雅

魚子——久しきもあはれさき
 競いけつともあはれし
 物——めりよ小松のよもあはれ
 雪——りうらるる春道やまの畦
 田く鳥の羽おし斗をやけの系
 解くく雪やさきふり
 旅船を岸よ並へて春の月
 とももやまたたきぬ海の西

其谷
 成津輕 芳山
 浦山
 以中
 原丈
 文 蟻
 松高

そ——矢を尋てまらやんぬれ
 風くまらにほのぬれ敷やくる屋
 日少むとそ 詠めきぬや福妻子
 岸よまらぬの沖——やたけの声
 松林の中よとれらうらぬのも
 蟻海と平人の出うらるる人
 丸ひとほ考きくや敷のち
 連翹や露を出さくろの籠

如邊
 松月
 長長
 長耕
 田 丈
 如松
 東水
 樹佐渡 三

紅梅や人言信のちと松皮を 阿波 羽長

咲立ちと當年かぐれぬ梅の針 夷岳

風そよよえはまのゆとや朝の雲 淡路 笋跡

ふくくそふて安けやもろ乃成 淡路 楓處

指ゆして鉢木ぬふはや妻の面 希禪

をくむ表の明くうけよ和々和 讃岐 東鶴

赤土を蒸すのこもて福壽草 李曉

日のぬく風のをきや花堂 眞亭

風出く大志低よ折りな 栖霞

大志も我世うておろく 一栖

妻山や喜立中の雪かきよ 月浦

ちろおほく古ひぬうめの句成 其浦

そらと中けけ持まらる 岳雪

隠寺田のくろくろく 梅を 霞村

うくのすの籠もはす旭か 麻浦

まねやのくは ち原をはるの雪 娥月

○ 廿三

川り舟よりやまゝの松や梅の影 豊后 孤雪

漱石の影を船すれくしの岸に 翠羽

梅の香の通ふ庭木や月籠 伯州 蕙石

大途千百の江よりやまゝの月 赤穂 鴉雛

何れもみちのたむや子代の春 惠淫

比ふもよみゆきて雪雀の口一をい 紀伊 桃雨

歌乞してわら梅を夢のたり 琴水

池の名も覚えてもとる折られ 月圭

里きくしの水まじりて春や之る居 石史

岩山も丸うもえたりはるの月 幸女

雪のいよも一際と川や松乃るも 和泉 梅堂

流れ出て隙をわたり梅椿を 可醒

青柳や千尋涙千日の色とり 梅旭

霜は白く音や空の影の折の竹 麦雨

猿曳や朝日まひらる鬘乃る雲 遠州 鳥谷

お布祓衣や春の影の海に 一 尾張 清

○

廿三

うらひすや聲のそらをばら福寸 鵬居
 嘗やあうとりよるのや一一つ 而后
 日の向くつちの影ふすこれれ 春 越歴 湖
 まねひのかわくしそと誕生来 杜 涼
 牛の子の角多ゆかや木のめえ 根 盛
 風中やめて松くへもとそ危 田 禾
 茶屋の椽意方への体これ 采 合
 鳴括一茶の木の長や雉子の声 波 同

友之部

山間のそとそとや時を 有 序
 一声と多る鳴や月とそと 夢 跡
 鳴たつる 陸のうへやふ如 社 蓼
 ちとまはれけや遠は浪のそ 膳 錦
 ちこれいけの山や時多 粟水 蒼 仙
 波さねを声けらそと時鳥 梳 乙

またぬねのうきたけのりり馬魂

伊勢 如 聖

月をの念もつきて時鳥

左海 松 化

川東なるころの鏡を布とて寺

阿波 茶 雷

わすれは月よりけりり如所

東嶺 松 月

時をめて時の名忘れず杜宇

天草 成 峰

若引のりりたけのりり如所

千六 南 嶺

井戸の中ぬ一里磨一杜鵑

三四 如 碎

笑越て休む虫けりり子規

越后 毋 靜

木のやまのりり如所たけりり

信列 智 来

灯の消へ身すまじりり子規

上勿 荒 鳴

河ふ川戸のをとめりり杜宇

江戸 為 山

家老といふ叔もけりり河をき及

加賀 希 云

あ音の藤身になれりり不知所

熊登 三 降 女

けりりのとんたけりり如所

一 松

川明や真昼の空をけりり如所

笑 囿

きりぎりすの川を渡るの河の若菜也

後岱 積岐

華の葉やぬるるはなぬきとて

塩屋

水おとす跡はるはる菘子也

菘柳

居たりてはるはるはるはる也

龜嶋

唯子やあはるるはるる也

李傑

おすはるはるはるはる也

嘉際

すはるはるはるはる也

柯喬

伐てはるはるはるはる也

芳秀

花首より風のいれきり垣の百六

此芳

門畑や菘子の葉あはる牛の息

紫石

遠はるはるはるはる也

如雲

舟のまやまやと押く船の葉

仕友

老るる秋待あはるはる也

林水

秋のゆきと船とあはるはる也

木長

日盛りをはるはるはる也

思風 阿波

鶯鳴てあはるはるはる也

松丈

百中にゆくて長くし麦の秋 千 像

夕光や何処と見ればと秋 冬後 水

雪や梅のほそくある花 日向 昇

ゆきや松の磯の下りの花 佐良 收

人里のこえそ道向ふ 松前 谷

うぐいすの鐘を渡り入梅 持原 先

友のおや人の中り 拾 山

おのこも川菘 麓 山

里あはれ 江戸 抱儀

黄ふより 京 頑水

涌ふれそ山 居 情

城 貫 之

い 如 圭

夕 能 平

志 月 暮

物 月 坡

雲の何となくや陽草のうらみ 伊勢 只青

夢のうらみ 紀伊 菊亭

近所の江はちと 紀伊 梅屋

掛香や 紀伊 梨齋

街道へ 紀伊 楓下

昨日 紀伊 其梅

小石 紀伊 柳月

尾の灯 紀伊 梅亭

むら 紀伊 淇青

清た 紀伊 清琴

ワ 紀伊 黍丘

あ 紀伊 不浅

る 紀伊 素未

夕 紀伊 野塙

野 紀伊 梅雄

の 紀伊 梅逸

岩をれりぬき流やそよの峰 竹畦

市場まで細のしつや雲の家 一甫

声や声一改りあこ人よあぬら 兵庫 可大

ぬれてまて夕立ほめり時ち哉 五大

あふひめしきそ超唯くうりれ 明石 而得

雨晴し帯の口まや嵐山 柿玉

明るし青のう消ぬ解智の泡 拾塵 椀五

殺強くすしし坊や河原の灯 播磨 丹跡

新瓦や井枯る目をまわらさる 妻郊

川ききや蓮のう花をを流り雲又 百可

百合咲て竹垣おらる小庭う那 茶琴

山鳩のそりり啼也守しけりれ 信中 塩梅

藤くはるぬ秋をそりまきそ和松魚 信中 雲窠

しるのし剣る柳のやもつ川本 丹波 九華

自隠よくわてはひしや杜若 越前 如積

せらむ子の息をそりけお目の管 半化堂

夕立の雨とや砂路のふもろく 素重

天井のすそもまわらば土用子 裁中 水哉

牛の乳の字子も厚れて雪の路 青身

なま〜とや細末漱すちの右左り 不

踏ねくらひうろゆる〜や苔のむ 裁后 乙良

篝ながらうらぬれ敷そ花衣くら 巴

友山や〜とね〜はち〜れ〜と〜 警

うら〜と〜葉も〜魚の〜杜り 市

肌控〜う〜と〜れ〜と〜ゆ〜と〜 出羽 御風

舟のふや〜と〜と〜量〜の〜ひ〜明り 摺 阿

け〜と〜ち〜知〜と〜と〜ふ〜や 雪 守

輝ね〜や川越〜れ〜ひ〜と〜安堵 佳 風

総着〜と〜同〜を〜め〜た〜や 津 汎 守

牛の脊〜と〜平〜す〜と〜ね〜り 英 里

澄も〜と〜け〜〜と〜の〜う〜と〜 松 清

つゆ〜と〜葉〜と〜秋〜を〜ふ〜と〜 梅 水

才の交の面や田少く城の響 露英

夕立の河と大岳の面より 祇年

丹の谷と日之能子屋の種麦草 藤登 弓号

船すくし流きくしておとの磯 烏島

檜挿流ふゆれか番々や杜若 月價

ゆきまやひと風俗らう木の子 奇林

菽くちや字子押れそ百合の花 禹功

垣一重ふさそくれり 恒牙 嘉道

挿挿しと架も同し河川はれ 改有

冬よりも色をつめし 夜水 梅谷

旅人の流しと河さき 東風 吏風

あつけて河より流はるは 涇松 涇松

ふねをたてきくし 如河 如河

樹をたけし 棠溪 棠溪

日のめくろ 丹嶺 加賀 丹嶺

弓子 東雅 東雅

三つ一々の節の菊さのふりつるれ 豊收
 みしり秋や日の出るるえぬ時葉を 里筋
 くらりてはあつて飛ぶ散れ 徳平
 常や葉の二枚あふ老ををりて 葛露
 葉もは日送りあそび 小夫
 生そ飛ぶ扱ひふりや和松魚 羽丈
 桐の葉のうへをうらむ雪の峰 一雄
 山も水や一巻うたの明馬 文州

秋之部

十月月やワケまうしるををりて松 塚 比 方
 池ひらりるる由とくや三日のうら 金 江
 三日月や霜の多の巻うの上 近江 芋 丈
 西のうら光来りくもおとるり 松 月
 名月お学こつるそ舞おふ 比 許
 生院ふ川もあつて秋のうら 玉 童



出る月の市一ひろたる神の都

伊丹

太乙

名月や五斗の守ふ妙とあは

紀伊

具泊

う海や田らりともきぬ海の上

木岡

月半むや梅をまらぬの幸奈

一和

阿のそ海と丸巻のそ居の月

招白

名もや一際さすも庭の相

鳥曉

い川の冒り秋の月とて海の月

淡路

塘雨

吾娘の心ごとく一ぬ居のう

墨雨

雲起れて又もささり月尼母

加賀

广彌

星の日のい川とて秋の月

季節

つ風呂の湯とらんつり秋のう

能登

一秀

字つけて出さるけ居一原の月

史牧

秋明るを覚悟や浦の月見船

李騰

浦才重の影たもけそそ月相

兔尺

海山も霧入しし月と秋の月

禾訂

山はとの秋はあゝとて一盤のう

津波

文友

七五

〇

聖

立待や山の端 雲の波 百年

出雲

何たる秋を露にすまの月雨 四 溪

律勢

山里や月まゝまはりのくぐり 仙 菜

京

月代やひとく 吾妻の松の露 霞 田

多ハ江干にや 落針を居のく 篤 明

晴陰やとまのれハ 御振まのり 風 礪 山

江州

撻む月と杖て 荷や雪の糸 米 友

ゆくゆくれはのまれば 守紅葉部 里 壽

雪の美を 顔平 竹てくすり 堀 梅 影

白雪の中より 送舟て不二の山 紫 石

晴く川や 暑く 未ぬふり 御振花 竜 起

不二晴て 鳥も 鳴く 秋のくれ 司 山

掬待や 茶の盆のうへ あり 松葉 醒 花

兵衛

はつ秋や 涼たの 便りハ 多多く 妻 人

伴丹

世帯や 秋明の 跡る 水くま 鹿 久 里

七口

言のほもとく有るは燈籠引

大板 石叟

碎て来て云彼の何る新酒車

珠 肩松

松く世より何も短く非の市

松舟

佛しさの尚つりり秋の面

松風

草舞千子の身届くはれり

一水

遠くくの親の足て為る角力丸

史梅

持り有て名子久しや唐辛

此松

身元より癖のしえり破り丸

休叟

持り益もきりりはれり丸

侍頭 養瓜

悉く振り力の出まてを所はし

侍男 蕙雨

和秋や花登り軒のまゆり音

松拍

ひ川と居る月を秋まのりゆり

寸州

小百や外田のくも水明り

尾張 梅西

稲妻如川より響る所の末

文之

風千四よりかきぬ毛や廿師花

春松

ゆきとねく立出そ秋のまれ

三河 塞馬

ゆの島も国一世界。秋のそよ

京 本行彦

いも一葉秋千ぬくはけり

芳舎

思つてく中子秋立片き

石生

強くお中のいそけり秋のそ

照流

明たてくくくくくくく

禾明

葉くくや葉よ返つては

蒼香

屋土の軒一もそれて葉の花

虚真

正るて春頼りあられの若

成之

しうけくや庭子けくく山の裾

淑風

持はて子りもあすや迎くる

如榮

新嫁や佳き春上れ日のぬく

可真

羣て来てあすもよもや後り

又水

生一おま月片をて門まぬ

未峰

佛へのつもあつめく葉つくり

長風

漱平むんいふるもきくや夕のそ

名岳

谷の戸や秋を初音のあけり

孤南

共

秋もや遠ま人行りし
芳馨

紀伊

皮音を垣りてそそきくのみ
南溪

竹の葉あはれもささけ鳴
芦汀

落栗の鉢り白少や山の土
素成

巾いふも藤のしるや糸の葉
又成

糸総り付来り草の種あはれ
如鳳

山籠の家もどろろとたすき
花曲

羽をひのつれも尾をけ降り鳥
喜水

福杉や川干りあはれのみ
梅畝

楳枝の裾も明く山ゆきも
湖隈

落栗や葉の裁はのふりき
可聚

あはれ秋や春の片も一葉の光
月魚

冬月と干秋の虫あはれ葉のうき
逸成

吹起り響の響もやゆきの風
里全

風さす紙もさす響もさす響も
三都里

捕思夕日やあはれ秋のりき
祖御

廿二

安火や管一不む旅の人

出羽 球高

穂芒の狭く候よ磯家うれ

岳外

河津の舟千載はれまきこ月おひ

池柳

折打千福一房の折あうれ

序院 二丘

舟のち引や磯田の鳴子縄

加賀 甚椿

新茅や公かぶ折る俵

加賀 大夢

云位ひらく雪舟をりや岳の杖

霧朗

あめあふし妻のる月おひ一編者

林坡

のら秋葉の梢よくく一桐ののん

越中 桐高

葦や亀いともゆれを川つる

慶里

秋空一喉少と猫の人おれぬ

能登 其玉

何ふくせや松千折折く九十九得

青波

淵柳とのを寄まほる秋きうれ

扇松

鐘のとり鳴えとて夢よは花種草

知山

深山木を引出り音や秋の風

翠柳

あ上とせよとて夢うや天の川

桂艾

那千土つけそらうのくー騰角力 習之

種ひらふちもち子ねふらうなり茶 梅兄

葺うらふや一人をねきて栗きり 舞村

備たふぬふすあき新 艸中ま 西庵

折新やぬく折さうさ改良のき 凡竹

三日さのあま産やーらの考 孫山

お子唄ーあふの何とありぼつ 東画

牽舟と千穂はつともやそ稲雀 娯遊

世年真とふをあぬ細や新のま 茶丘

湖千のぬきーむそ月の一 雪路

あーもの種末や種子のおはえ啼 小汀

ゆふらねやゆふの舟をさるる 梅晁

荷千付て船さうのや新うの 宣風

ゆふらねやあき知くの 楮木もあ 結氷

川のゆらへーともねておのき 古鴈

風の来てはうらをさるる花経 雲岱

越后

つとく久柄際千重の幸音部

越前 梅文

はのたけは 霞のたけや林の風

若狭 元山

芳吹や有明御子海のうん

丹波 貫蕉

さく萩千一庭まゐるはくれう南

但馬 南涯

踊りうみとささりしやま公

寛 忠雄

ふくぬはハ安千はひを妹の風

赤穂 青池

るのそと追つやをさうの一梅子

吟雪

おれやもははれぬ雪の音

一簣

尾をひき守るもさる秋の水

信中 嫩緑

山水や音の中一まゝ一船の音

後鳥 路池

秋の夕一まゝれ集るや船乃上

菰 互

穂久一物もさるれて尾に葉

東讃 為石

船室の空を飛鷹のあさくれ

藤 舟

浦の星を秋をさるる藤舟

月舟

為 残る能や 歩旅の名音

五方

おつて川水もさるる秋の色

芦 溪

雪の初 花の初 雪の初 流 藤

星合や 月あると 梅園

世のうも 月あると や山田守 雨 錦

服の清 紅く ちりちり 雲 坡

人 去る 夕ぐれ 対 例

きくの 香は 出合や 山の 蕉 室

秋の 川や 藤の中の 花 住 務

冬は 木草の 中や 萩の花 森 川

冬之部

さけ 花 初 雪の 初 儀 兄

や 花 初 雪の 里 曲 阜

降 埋む 五 松 青

常 常 常 菱 青

花 花 花 花 因

雪 雪 雪 示 豊

了月とくまの服まのる雪の糸 迎江 月糸

松くはをかちて紙一雪の糸 竟坊

障しめて静る雪の清く乳 風雪

中庭や川く乳竹く雪の声 其沖

雪つむや庭のりまも酒の上 松栢

不足れま流れひくまそゆの里 蒸舟

山くく雪くまそらそらゆのゆかり 如く

祝ひたりくろくろく流やゆの雪 尾張 應知

はつ雪やとの所くくもはに梅疎 讃岐 梅林

魁千雀のふむやまおの雪 京 也然

月あえそくくふれぬ松の雪 三箇 南山

ゆれをれやもくくおまの風の隈 杵雪

雪の結も凝てくれくせとの末 金沢 如氷

露て居てくくく雪の仰く 能登 稲波

おひしりや後歩たり一雪の 越前 晚籟

一羽くろくろく送るや雪の糸 玄子

おとろりつそ	春海	雪の原	光武	京	梅通
おれのと	いけり	りりむ	しん	厚	後
于	鶴	倉	ふ	り	つ
家	の	名	の	葉	金
自	年	あ	る	よ	そ
市	の	明	や	ま	の
鷹	飛	来	て	唯	中
					白
					月

竹	垣	千	降	出	音	や	小	松	一	之	花	委	有
外	河	と	や	新	落	つ	ぬ	小	毎	系	系	矣	
一	里	千	一	宮	海	と	り	れ	建	之	花	大	板
釜	の	あ	え	と	あ	て	起	り	り	小	松	海	月
風	や	一	川	ふ	文	子	沢	の	月		白	鳳	
木	か	ぶ	し	小	根	の	入	る	妻	の	二	葉	花
松	の	脊	千	録	を	か	け	る	落	を	分	金	龍
黄	鳥	の	た	く	く	千	飛	て	物	一	之	起	

蟹の住居も知れてくれ尾を

紀伊 世外

遠近のゆきや尾花のけしき

虚心

秋のゆきもすれ谷草や鴨の声

文昇

得しにくれのそけり松の音

石雄

楳の火牙海草や秋の山のけしき

豊直

浪すくふ総の筈や啼きあがり

梅因

三日月の返寸光りや為沙

露舟

来りたる竹もきくや初とくれ

法眼 菊池

雀もよよと楳のわらうりや

伴操 鴛居

さき入る秋もきくや天の川

東談 雪片

山茶花のふとふとと海にこれ

青波

くれきりやゆきや秋の初とくれ

茅山

あき音のゆきやそれぬ木のをけ

其村

あきしと膝を何やけり尾をけ

昌山

河野のゆきやけり年の暮

杜 流

穀の香の穀子おけり時雨に

越屋 百古

用のゆきを 笈の水のゆき 堺 呂泉

搦印の中 千の音も 落を 松玉

ゆきとして 霧も けり 士屋

小流の 名を せ 一静

草漬も 岩中へ 赤も 越後獅子 米丸

きつらも せ 杖丸

草も くれ 牡丹知や 榮園

雪の 来て 居る 千 出を 五葉

啼 連て 一 為 ま 奈良 洗 糸

山 下り 人 を 伊勢 五 鈴

冬 千 草 の つ 香山女

麦 も 尾張 鳥 漆

五 梅狸

葉 の 花 や 里 孫

野 川 や 通 但馬 世 忌

ゆれ 河 も 吉原 村 台

○

孝蔚の皴こし子こがらからんられ 布ぬ帛い

載

洲しゅう烟えんやや蔚いののややれらをを河か霞せ 立た首しゆ

加

神かみのの木きのの花はなををたたののままややるる 鏡かがみ 遊あそ夢ゆめ

能

滝たきののををくくけけ一ひと羽はとと押おひひりり 竹たけ塙はたけ

木のの石いしよよとと踏ふもも折をりりやや霧きりのの空そら 千ち葉は

所ところのの啼なややるる雪ゆきははまま通とりり雪ゆき 如ごと園えん

ししくくやや子こ海うみりり流ながるる船ふねのの揺ゆ 糸いと玉たま

廻まわ板いたののおおとといい所ところやや夾はさ子こ縫ぬい 踏ふ城じやう

危あやししいい事ことををつつきき折をりり葉は葉は 文ぶん洞どう

水みづ仙せんやや日ひののめめをを見みるるもも十じゆ日にちあり 文ぶん曉あけ

明あきくくのの東あづまをを折をりり流ながるる子こ鳥とり 李り旭あつ

啼なけけるる日ひ和なごししるるぬぬれれ子こ鳥とり 石いし雅みやび

夕ゆふ照てりり子こ鳥とり一ひとおおききりり機はた子こ鳥とり 旭あつ未み

潮うしほ起たのの夕ゆふ明あきけけりり一ひとおお自みづか 花はな溪たに

おおりりよよききるる山やまもも来きるる海うみももれ 九く五ご

秘ひ所ところのの静しずままりりははくくれ 涼すず風かぜ

○

三六

以よせそく月は清く池のおちを

陸奥 祇春

木くさや時を定めぬたを

祖年

寒梅や并まらうて小舟月

一松

うけさ小舟入る詠の小春

出羽 風栢

沈より冬の露をさす江の小春

柏刈 崔槿

埋火を秋の時斗や雪の尾

近江 蕙逸

おち流るるくくれて青浦の松

梅雄

妻の色梅より思をさす冬の梅

梅堂

雪浪平春のいづちや梅れ琴

雨耕

ゆを向て風よのありや木のて揺

不夜城

焚たてて秋のさゆえす指火成

不局

見えよしてゆらるる向り浮寐る

巴郷

あま浪平朽ちおほしてれ尾む

梅井

川咲て山菜をちるや藪の乃

箕玉

山菜をのちとけぶるや水神

烏都雄

木のくさやあおちる極木鉢

閑未

中のけの地は言ふなり冬の月 甘節
 招きせの意てけけり雪の象 竹馬
 ちる回との力もけりて帰も 嵐英
 扱の子多明れハ軒子以雀 春岱
 里しハ鳥多招きか初れ 梅雪
 松うせの音河と流れまくれ 里節
 掃まけて詠て飛多や花木の 杞柳

四季混雑

唯ハ来て以々帯けり猫の素 京 雨象
 橋立や松平消込朝多 湖島
 牛石の脊中それや時多 のふ女
 月夜々砂川知しけり多 貴楽
 冬をいん一編ハ子目のまき 為水
 糸すろ樹を見てけり子規 ^{近江} 文行
 若月やけけり 峰の浪とち 葛雨

管初けそ名る渡川や月の梅 大坂 照子

角子し菫の柳の片紗いよ 伊丹 古雄

友の月藤子とまゝてゆきらり 三國 士籠

横吹千両の降出はれのお 信州 月外

横魚子亭子嵐や春おろし 讃岐 穂屋

鳥の鳴変千おろし小妻おれ 松 翁

家一ッ山子一足添う林のおれ 水 溪

桂と雪の香千も曇りて春の月 知 来

西吟

文海

たぐしれそ安をるの柳おれ

漬種揚る池乃人亭 有 荷

由久唐千自ふりの旅の連殖て 海

新菜の釜の鳴りをよるさ 荷

りすれ存る年斌の房る月の杖 海

沙魚も賣未ぬ大あめ 荷

神子つれてめんと膝ふはり山

墓石坊のえて長厠 侍

風物形を石を畫の音を付て

茄子ちまり子裾つもんゆく

降流うれ雲のお子らまに降り

九輪坊のらく良代の障

孫や子を杖に補表の京巡り

を話した人の出世して存り

海

海

海

海

海

海

海

海

ぬれ糸も撫をん切よ坊を解き

深のちて済に亦停止

重なるる空平信礼屋の月

子ううふめく山麓れ反

ゆふら屋も一里ちとゆら冥ちて

入日世く思ふ親の日

貸しきり矯窮を余如く夢評

痛ゆら魚ハ強ふりりれ責

海

海

海

海

海

海

海

海

水湯立の形てはゆる鈴の音

岸

ふと鳴らせり樹の雪ちる

海

席画濟さハ藝子もたうえはき

岸

うわけて膝へお先は吸物

海

さう好は岸の本さねは遊ひ舟

岸

おりし月まのつる紀の山

海

外安を附まハ牛の尾を振て

岸

孺さのほろ冬巻らる片き

海

朋輩も茶畔の烟は成るれり

岸

お筆を弛て鼓えれきり

海

ぬりては花より鳴るき花百の畫

岸

これ来てのころ節日の禮

海

江戸よりも園にめりさう花連え

岸

疾も志いへ久石登る鐘

海

雨尾

陪夷を去りてをみ洛か都より五件菴裡か仮居せ
 いて東西南北の周をすむるも十有余年より日夜思
 心を盡しつゝも病を治すべしとてあま方弱れを
 つゝつたつたの命も阿叟の進めふりて四條の道に
 深淵をるるけ大州園と号して皆久重孫の芳をを奉り
 つゝ不自由をあら味嗜ゆり薪ゆりて彼は五尺の
 馬にぬらふか事敷も多しつゝめを待てを定ふ

古柱拭光りて
 庵の春
 文海

嘉永六癸丑春

京西余寺町東へ
 申の所江屋
 利助

